

フードドライブを広め、 フードバンク活動で支えあう地域づくりを

NPO 法人フードバンク狛江 理事長 田中 妙幸

1. 食品ロスを活かすフードバンク活動

(1) 食品ロス削減推進法成立

2019年5月、食品ロス削減とフードバンク支援を盛り込んだ「食品ロス削減推進法」が初めてこの日本に誕生した。フードバンクの発祥の地アメリカでは、国が買い上げた余剰農産物をフードバンクへ提供することや「よきサマリア人の法」（善意による寄付であれば、事故等があっても悪質な重過失がないと罰せられないという法律）の整備など、国ぐるみでフードバンク活動を支援する仕組みがある。西欧でもフードバンク活動は長い歴史を刻み、フランスなどでは大型スーパーの賞味期限切れでの食料廃棄を禁止する法律も誕生している。遅ればせながら日本でも、フードバンク活動への支援も含む食品ロス問題への取り組みが始まっている。国レベルではすでに2013年より6府省庁をまたいでの様々な取り組みが進行し、食品業界でもロス削減への工夫がされてきた。賞味期限3か月以上の食品の「月日表示から月表示への変更」（賞味期限表示の日付が1日でも遅いと流通にのらず食品ロスの原因となっていた）、容器や包装の工夫、「3分の1ルール」（製造日から賞味期限までの期間の最初の3分の1までに小売店に納入し、3分の2がくると売り物から外して返品・廃棄する）という商習慣の見直しも進められてきた。

世界的な課題でもある食品ロスは、毎年、世界の生産量の3分の1の13億トンが廃棄されている。2015年9月の国連総会では、SDGs（持続可能な開発目標）が採択され、ターゲット12で「2030年までに小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料廃棄を半減させ、収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食料の損失を減少させる」と世界の目指すべきゴールが示され、各国が目標値を決めてきた。日本政府は、2018年に「2030年度までに家庭から発生する食品ロスを2000年度比で半減する」目標を設定している。家庭からの食

品ロスは、2000年度で433万トン、2016年度は291万トンとなっており、あと74～75万トンは削減が必要で、それは一人あたり年間約6kg減らすことでもあると言われている（村上芽・渡辺珠子著『SDGs入門』日本経済新聞社）。

(2) 食品ロスとは

日本の食品ロスは643万トン（2016年度推計）で、内訳としては飲食店133万トン、小売店66万トン、食品メーカー137万トン、卸売店16万トン、一般家庭291万トン（消費者庁「食品ロス削減関係参考資料、令和元年7月11日版」より）である。割合を見てみると家庭からのものが4割半を占めている。この数字は国民一人あたりに換算すると、毎日おにぎり1つか2つをまだ食べられるのに2兆円かけて廃棄している計算になる。フードバンク活動にも詳しい食品ロス問題のジャーナリスト、井出留美氏の最新著書『食品ロスをなくしたら1か月5000円の得!』（マガジンハウス）では、家庭での食品ロスをなくすと月額5千円節約が可能であり、消費者庁の試算によると4人世帯で年間6万円ほどがロスになって棄てられていると記されている。

また買った食べ物がそのまま捨てられることもある。「消費期限」と「賞味期限」の区別が十分に知られていない。「消費期限」は、期限を守って食べることが必要な劣化しやすい食品につけられている。「賞味期限」の方は、おいしく食べられる期間のことではなく、期限が過ぎても食べることができる。人間の五感を働かせて食べていけば食品ロスをまだまだ減らすことが可能である。

大量の食品ロスがある一方で、「格差社会」の広がりや、今日明日の食に困っている人が増えている。まだ食べられるのに費用をかけて廃棄される食品を、必要とする人（及び施設・団体）に無償で提供する活動がフードバンク活動で、この活動に国民的な理解や共感を呼びかけたい。

(3) フードバンクとは？

フードバンクとは、農林水産省の定義によると「食

品企業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設などへ無料で提供する、フードバンクと呼ばれる団体・活動」であり、「まだ食べられるにもかかわらず廃棄されてしまう食品（いわゆる食品ロス）を削減するため、こうした取り組みを有効に活用していくことも必要」としている。日本におけるフードバンクは農林水産省によって所轄されており、食品ロスの削減や環境負荷の縮減等を主な目的とする活動として位置付けられてきた。しかし近年の傾向としてフードバンクは、生活困窮者をはじめとした「食料の困難経験者に対する食料支援を目的とする活動」にシフトしてきていると言えよう。その契機として、2013年に施行された「生活困窮者自立支援法」の施行が挙げられる。具体的には、フードバンクによっては行政（福祉事務所）や社会福祉協議会と連携し生活困窮者等に食料を届けたり、あるいは社会福祉協議会自らがフードバンク活動を開始したりする動きがみられる。これは、「フードバンク活動が生活困窮者支援にとって有用であるとの認識が広がりを見せていることを示している」と『フードバンク・世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』（佐藤順子編著・明石書店）には記されている。フードバンク活動の最近の状況を的確に表現していて、そのまま引用させていただいた。「フードバンク」が日本で社会的に認知されるようになったのは、2008年のリーマンショックの時期に「年越し派遣村」ができ、若い世代の中にも路上生活に陥る人が増えていった頃からである。ようやく貧困問題が注目されるようになり、「子どもの6人に1人が相対的貧困」、「ひとり親家庭のワーキングプア問題」なども取りざたされるようになっていった。

他方で「フードバンク」と言っても、欧米に比べて日本での歴史は浅く、団体の活動規模も活動内容も多様で、現在100団体を超えて各県下に立ち上がっている。現状は収益のない小規模なNPOなどのボランティア団体が多く、食品ロス削減への貢献度は全体の1%にも満たないと言われている。財源問題とともに、ボランティア対応での運営の厳しさなど、フードバンク活動のマンパワーの問題も課題として問われている。

2. フードドライブを広め、 フードバンク活動で支えあう地域づくりを

(1) フードドライブとは？

前出の井出留美氏の著書『賞味期限のウソー食品

ロスは何で生まれるか』（幻冬舎新書）によると、「ドライブ」という語には、車の運転以外に「募集のための宣伝」や「運動」といった意味があるとして、「（フードドライブとは）家庭で余っている食べ物はありますか。お中元やお歳暮で頂いたけれど、『うちでは食べないよね』『和菓子は子どもも自分も好きじゃないし』など、食べないもの。安売りやまとめ買いで買いすぎてしまい、気がついたら賞味期限が迫ってきているもの。災害時のために備蓄していたけれど、使わなかったもの。冠婚葬祭などでいただいたお茶や食料品セット。海外旅行のお土産でいただいたけれど、あまり好きではなく、そのまま放置しておいたもの、などなど…。そのような食料を、捨てないで持ち寄り、食べ物に困っている人や福祉施設に寄付するという取り組みがあります。これを“フードドライブ”と呼びます」と解説している。日本の代表的なフードバンクである「2HJ（セカンドハーベスト・ジャパン）」の名称も、世界最初に設立されたアメリカのフードバンクが、農場で規格外の農産物が廃棄されるのをフードドライブして集める「セカンドハーベスト（二度目の収穫）」ということで組織を作ったことからきている。

(2) 粕江は食品を市民寄贈でつなぐ

自宅を倉庫にして粕江でフードバンク活動を始め、福祉相談課生活困窮自立相談窓口と連携した緊急食料支援の提供世帯が増えてきたころ、市の環境政策課の職員が「こまエコまつりに参加してみませんか」と訪ねて来た。申し出を快諾し、以降「こまエコまつり」に毎年参加している。市庁舎のロビーでフードドライブや公民館の集い、「くらしフェスタ」、「こまえ市民まつり」、パルシステムの「粕江センターまつり」など、学習会や講演会ではもちろん、公民館、行政の開催するイベントなどに参加しフードドライブで食品を市民から集めた。企業やデパートもない粕江市で企業回りするより、市民に呼びかけ、家庭で眠る食品を持ってきてもらう方が食品を確保しやすかった。市民が食品を寄贈しやすいように、熊本震災支援をきっかけに市民活動支援センターにケースを置いてもらい、震災後は常設の食品集荷場所になった。市内常設の寄贈食品の集荷場所は4か所へ広がった。行政の場所ではビン缶リサイクルセンターでも月に一度の食品の寄贈受付をしてきた。

「フードバンク粕江」の食品寄贈の基準は「常温

保存の食品で、1 か月以上賞味期限の残る、缶詰、乾麺・カップ麺・袋麺、レトルト・即席食品、お米、乾物、調味料、飲料、お菓子など」となっている。

(3) 倉庫を借り NPO 法人として歩みだす

2016 年 5 月に NPO 法人の登記を完了し、6 月末には自宅から市庁舎そばのアパートに倉庫事務所を借りて食品を移した（その後現在の倉庫アパートへ引っ越す）。日本で 2 番目に面積が小さな狛江市で立ち上げた「フードバンク狛江」は、地域の情報誌だけでなく、自宅倉庫時代からメディアの取材を受けた。MX テレビに食品ロス問題で取り上げられ、東京新聞の記者も大きな記事を掲載してくれた。それを追いかけて読売新聞など、ほとんどの新聞が記事を掲載してくれた。新聞記事の反響は大きく、他都市からボランティアの問い合わせや寄贈食品が届くようになった。この支援は現在も続き、新聞に掲載されるたびに問い合わせも寄せられる。狛江の困窮者支援は他都市からのあたたかい応援もあって継続できている。

(4) 寄り添う支援を可能に

2017 年 4 月、狛江市と食料支援の連携協定を交わした。生活保護の手前で相談支援を行う「こま YELL」と連携することで、「フードバンク狛江」に集まった食品を食の支援を必要とする世帯へ提供でき、金銭の支援の少ない中で就労（準備）や家計を立て直すことに活かして使われている。相談員にとっても、食品を渡す際に再度顔を合わせることで寄り添う支援を可能にし、食料支援は欠かせない支援の一つとなった。福祉窓口で月 40～80 件提供し、2019 年度には 12 月までに 4 トンを超えた食料提供をした。また、生活保護のケースワーカーや納税課の部署などから食料支援を必要とされることもある。備蓄用として簡単に食べられる食品も福祉相談課に置いて、対応した困窮世帯に手渡されることも多い。

(5) 生協のフードドライブで大きな支援

食品集荷量は、2016 年には年間 3 トンであったが、2019 年には 3 倍の 10 トンを超え拡大してきた。賞味期限のチェックなど、食品が増える与管理も大変になったが、生活困窮自立相談窓口には 20 歳代から 70 歳以上までまんべんなく来られ、食料支援提供数の増加傾向が顕著になり、集荷量を増やして必要量を確保していかなければ追いつかなくなった。そのような状況の中、生活協同組合の組合員か

【生協のイベントでのフードドライブの様子】



らのフードドライブによる寄付・寄贈が大変ありがたかった。「東京南部生活協同組合」をはじめ「東都生活協同組合」による、年間 2 回の組合員の家庭に眠る食品の大型寄贈だけでなく、「パルシステム東京」、「コープみらい」もイベント時にフードドライブを出店させていただいた。4 生協の支援は、フードバンクの困窮者支援を理解してもらう上で、何より心強い追い風となった。

また、世田谷の日本大学商学部・秋川ゼミナールの大学生 6 名が、設立時に 1 年間関わってもらい、ホームページの立ち上げやイベントに参加し、独自に祖師谷商店街とコラボしたフードドライブにも取り組み、後輩にも引き継いでくれている。

3. ひとり親との出会いから フードバンク狛江の立ち上げへ

(1) フードバンク立上げのきっかけ

ある偶然の出来事からフードバンク立上げへと向かう事になった。5 年半前、道路角に小学生がポツンと立っていた。私は「何か困っているの?」と思わず声をかけた。「家の合いかぎを忘れた」とその子は私を自宅アパートへ連れていき、「おばちゃん、電気がついていないけれど、誰も帰っていない。夜 7 時半を過ぎないと誰も帰らない」とつぶやいた。私は「おばちゃん家で待っている?」と誘い、我が家を教えたが、近所の人と立ち話しをするうちに、その子はその場所から消えた。帰宅した私は、その子のことが気になり、夜 8 時過ぎに、思い切ってアパートを訪ねた。消えた子は、友達の家へ身を寄せたあと帰宅し、家からは家族がそろう夕飯時のにぎやかな団らんの声も聞こえ、私は安心した。話すうちに、その母親は 4 人の子育てをするシングルマザーだと

知った。その母親も私も関西出身ということもあり、ご近所さんとして声をかけあうようになった。正規職員で働く母親は、祝日も働いて給与が13万円台、アパート代が8万円、上のお子さんがアルバイトを掛け持ちして母親を助けていた。お子さんとも仲良くなり、私はイワシの梅煮などおかずや白菜を半分おすそ分けをするという関係になった。「4人の子育てをするひとり親家庭に福祉の手は届いているのかな？ 何か手助けできないか？」と思った。

その頃、テレビで「フードバンク山梨」の活動を知った。テレビ画面では「フードバンク山梨」から段ボールが届き、お米やお菓子など食品が沢山入り、開けたシングルマザーの母親と子どもが、声を上げて喜んでた。「この活動なら、お母さんに気を使わず食品を受け取ってもらえる！」とテレビ放映の翌日、私は「フードバンク山梨」に電話をかけ、その3日後には山梨県南アルプス市へ向かっていた。

(2) 狛江市にフードバンクを

2014年9月26日、訪ねた「フードバンク山梨」の理事長である米山けい子さんは、丁寧にフードバンクについて話してくれた。「私も自宅を倉庫に立ち上げたの。まず学習会をして、食品は集まるから提供する所を見つけて。本を紹介するね」と、日本で15年フードバンク活動をしている「セカンドハーベスト・ジャパン (2HJ)」のチャールズ・マクジルトン氏を取材した本『フードバンクという挑戦＝貧困と飽食のあいだで』（大原悦子著・岩波書店）を紹介された。フードバンクについて何も知らなかった私は5冊購入し、持ち帰った本は友人に買ってもらい、一緒に学習会を開催した。市役所の福祉相談課にも本を手にして「フードバンクを狛江で立ち上げたい。困窮者について話を聞きたい」と頼みに行った。市の福祉相談課の主幹は、生活保護制度など狛江の生活困窮者の話をしてくれた。「フードバンクが立ち上がったなら、こちらでも助かります」と、福祉相談課で本を回し読みしてもらえることになった。

(3) 市の福祉相談窓口と連携へ

当時、狛江市では生活困窮者自立支援事業が始まり、東京社会福祉士会が委託を受け、「こま YELL」という福祉相談課の窓口で相談支援にのり出していた。この「こま YELL」と繋がることを考えて学習会を開催し、2015年2月の第1回学習会で「フー

【講演会でフードドライブ】



ドバンク山梨」の米山理事長にフードバンクの講演をお願いした。2度目は7月に、市の福祉相談課の主幹による「生活保護について」をテーマに、さらに当時私がノウハウを学んでいた「フードバンクかわさき」の代表の方による「フードバンク活動の実際」という講演会を開催した。この2度目の学習会で初めてフードドライブに取り組み、予想以上に食品が集まった。集まった食品を自宅で保管し、「市の困窮相談窓口で提供できないか」と福祉相談課主幹に相談した結果、提供時に転売禁止や善意の寄贈食品であることなどを記した簡単な同意書に利用者の記名をもらい、「こま YELL」の相談員が自宅へ食品を取りにくる形で了承された。2015年7月24日、市の生活困窮相談窓口と連携したフードバンクの食料支援が始まった。現在に至るまで続く記念すべき初日となった。本当に嬉しかったことをはっきりと覚えている。

(4) 他都市からの SOS にも応えて

1年ほど支援した他都市の、あるひとり親の忘れられない言葉がある。それは「子どもには『お母さん食べ物もらうほど困っているの?』と思わせたくない」という言葉だ。「見えない貧困」は「見せたくない貧困」でもあり、様々な理由で困窮に陥っても外からは見えないような社会状況がある。他都市からも「病気（時には障がい）を抱えていて働けず、しばらく食べてない…」「あと米が2合あるだけ、お金もなくて生活保護費は10日後に…」「工場の派遣労働で、吐いて出勤できなくなった。生活保護をと相談に行ったが、若くてダメだと…」など、切羽詰まって SOS が入ってくる。「一度だけなら食品を送ります」と配送している。困窮相談窓口などを抱える行政や、社会福祉協議会の担当者・部署から視察に来られることも増えた。格差社会の進行や

派遣労働の広がりや貧困を増加させ、個人への食料支援の要請が高くなってきていることを実感する。

(5) つながる地域での広がり期待して

2018年夏休みから、給食のない時期に困窮率の高いひとり親家庭への子育て応援も始めた。地域で子ども食堂をはじめ、福祉団体にも食品の無料提供をし、交流会を開催して、声をかけあえる地域づくりを進めている。

「フードバンク狛江」は、市民から家庭に眠る「もったいない」食品を「いただきます」と受け取り、提供を受ける次の方の「いただきます」へつなぐ意味で、合言葉を「『もったいない』を『いただきます』へ」に決めた。目線を上げるとSDGsが示すように、今地球規模で温暖化による問題も大きくなっている。SDGsを学んだ東急キッズベースキャンプの小学生がボランティア体験で「フードバンク狛江」に來られた。2月にはフードドライブにも取り組み、食品寄贈を受ける予定である。東京都市大学付属等々力高校では、昨年の文化祭でフードドライブを開催し、寄贈に來られた。今後、狛江の高校でもフードドライブの取り組みが始まる。

「見えない貧困」が広がっている中で、共に考えようとする人々の温かい広がりがある。食品を食品

として活かすフードバンク活動を通じて学んだことの多さに身が引きしめる。広がるフードドライブの輪を大切に、これからも地域に必要なとされるフードバンクとして、学びながらつなぎ続けていきたい。

【食品区分した保管棚】



令和3年度用 実教出版の家庭科教科書

家基 314 新家庭基礎 パートナースhipでつくる未来

- ★基礎・基本から Step Up
 - ★単元ごとの「導入ワーク」で動機づけ
 - ★自分の生活をデザインする 教科書
- B5判／212ページ／カラー

家基 315 新家庭基礎 21

- ★「テーマ学習」で、より深く学べる
 - ★見開き構成でテーマを完結
 - ★「持続可能性」の観点を重視
- B5判／192ページ／カラー

家基 316 新図説家庭基礎

- ★基礎・基本の定着と体験を重視
 - ★ワイド版で読みやすい紙面構成
 - ★完全見開き展開
- AB判／192ページ／カラー

家総 309 新家庭総合 パートナースhipでつくる未来

- ★基礎・基本から Step Up
 - ★単元ごとの「導入ワーク」で動機づけ
 - ★生活に必要な知識・技術が身につく
- B5判／244ページ／カラー

生デ 301 生活デザイン

B5判／240ページ／カラー

家庭 306 ファッション造形基礎

B5判／192ページ

家庭 303 生活産業情報

B5判／144ページ

家庭 313 フードデザイン 新訂版

B5判／240ページ／カラー

家庭 311 子どもの発達と保育 新訂版

B5判／144ページ／カラー

【文部科学省著作教科書】 家庭 302 ファッションデザイン

B5判／242ページ